

平成紙



おりおりの記

ーオペラファンのたわごと

日本証券金融株式会社
顧問

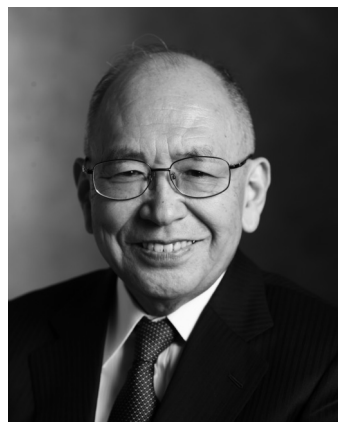
小島 邦夫

「ドイツ人を知るには、オペラ特にモーツァルトとワグナーをお奨めしたい。」もう40年近く前、フランクフルト駐在から帰ってまもなくのころ、新たに赴任する先輩に生意気にもそう言ったことを覚えている。2年半に亘るドイツの生活で感じたことは、オペラがドイツ人の生活に深く溶け込んでいるということであった。人口70万人というフランクフルトで、夏場を除けばほぼ毎晩オペラが上演され、それがほぼ満席ということから見ても理解できよう。小生自身、もともとは妻に引っ張られてではあったが、為替の総フロート移行、その先は第一次オイルショックといった時期の駐在員生活で、2年間で40回以上通った。たまたま機会があって、バイロイトとザルツブルグの音楽祭にも出かけた。演奏自体はもとよりすばらしいものであったが、特にバイロイトではドイツそのものと感じたその場の雰囲気には圧倒され、年を取ってからでももう一度来たいという思いがした。

帰国してからも、機会は少なくなったとはいえ、海外からの引越し公演を中心に出かけているが、必ずしもじっくりしない感じを持ち続けている。オペラはやはり欧州の文化、観るとすれば現地であるということかもしれないが、それはともかく、例えば、演奏するホールが大きすぎるといった受け入れ側の問題もありそうである。

大方の役職を離れた一昨年、再びバイロイトと

ザルツブルグを訪れる機会を得た。大いに期待して出かけたが、特にバイロイトでは残念ながらいささか失望して帰国した。もともと中世ドイツの伝説や神話の世界の話を題材に



したワグナーのオペラを近代に置き換えた新しい演出、パルジファルにハーケンクロイツが登場するなどかなりの違和感を禁じえなかった。聴衆から終演後ブーイングがあったことなどそう感じたのは自分ばかりではなかったようであったが、オペラは時代に即して変わっていくということだけに、とうとうついていけなくなったのかといささかさびしくも感じた。そこで、「バイロイトはもういいね」というのが我が家の結論であったが、今年はワグナーとヴェルディの生誕200年、もう一度バイロイトに行き、今度こそ「ニーベルングの指輪」を観たいとの衝動にかられた。それが、思いがけず、実現しそうになっている。もう一度失望するリスクがないわけではないとは思いつつ。